

---

# 地球に戻るためにまずは異世界を

火だるま

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

地球に戻るためにまずは異世界を

### 【Nコード】

N0757Y

### 【作者名】

火だるま

### 【あらすじ】

気づいたら異世界にいたハルト。狼に育てられ、地球に戻るために旅に出た。平和に穏便に地球に戻りたかったハルトだが、旅先で様々な事件に巻きこまれていく。ハルトは無事地球に戻るのだろうか？

## 1話 夢？

ここはどこなのだろう。

周りは木々に囲まれて、ハルトが立っている場所だけはくりぬかれた様になっている。

ハルトは、なぜこんな場所にいるのか思い出そうとしたが、分からない。

記憶が曖昧で、自分が最後に見たものがなんだったのかも思い出せない。

だが、脳内で不思議と答えはでている。

ハルトの家の近所にこんな場所はない。

そうなれば残る答えは一つ。

夢だ。

夢と一旦決め付けると、確かにここにいる前に寝ていたなーと都合よく記憶が蘇る。

それにしても、周囲を見回す。随分とリアルな夢だ。

たくさん木がひしめき、自分の居場所を確保するように押し合っている。

ハルトが立っている場所を除くと、本当に森だった。

ためしに手を伸ばして触れてみれば手に伝わる樹木のざらざらした感触までもあった。

いつも見る夢は何が起こっているのか分からないくらい不安定なものにとハルトは首を捻る。

ハルトはこんなに完成度が高い夢を見たのは初めてだと感想をもつ。

「何か、怖いな」

太陽の日差しを遮るように聳え立つ木々に囲まれているこの空間は異質に感じる。

今までの人生を都会で過ごしてきた彼にとって木がたくさんあるこの状態は慣れないものだ。

空を見上げれば太陽があるというのに、光はあまりない。

葉の間から申し訳ない程度にしかない光に体がぶるりと震える。

光が差し込みにくい暗い空間だと必要以上に恐怖心が生まれる。

「こ、怖くないからな？」

自分に言い聞かせるためにハルトは独り言を呟いて恐怖を取り除こうとした。

だが、あまり効果はない。

とりあえず、立ち止まっていてもつまらない。夢が覚めるまで散歩でもしますかと足を動かす。

「……ッ!!!」

遠くから響く叫びが届き、無意識のうちに体が強張る。

人が発したもののようだ。

俺の夢の癖にわりと凝っていると思えば自虐気味に褒める。

夢って確か深層心理とかをあらわすんだよな。

俺の夢だ、可愛い女の子とか出てくるに決まっているとお気楽な考えを浮かべているハルト。

ハルトは、人がいたことにわずかに期待して声の方に向かう。

慣れない森の中を歩くの難しく、何度も転びそうになったがハルトはぎりぎり歩いていく。

夢なんだからこんなとこまで細かくしなくてもいいのにと愚痴りながら木の枝のパキパキ音を楽しむ。

木からだらんと情けなく垂れ下がっているつたのようなものに、

より腕に傷が生まれる。

危険なものではなさそうなので放っておく。

どうせ目が覚めたら治るんだからと楽観的に前へ進む。

目的地に近づくごとに違和感を覚える。

木が爪のようなものにより挟られている。

それも先程声のした方へ近づくたびに折れた木が目立っていくぞくり。

背筋に嫌な寒気を感じた。

ハルトはこの感覚に覚えがあった。

自転車に乗っていて道を曲がるうとしたときに感じて、慌ててブレーキをかけたときだ。

あの時は自分の勘が的中して猛スピードで車が抜けていったのを覚えている。

進まないほうがいい。

だが、気になってしまう。

慎重に進めば問題はないだろうと腰を屈めてゆっくりと前進。

望まない傷を得た木がさらに増え、おまけに隕石でも落ちたような陥没した地面までもあった。

急速に膨らんでいく、興味と恐怖。

やめておけばいいのにも思いつながらも何があるのか気になる。

いきなり、燃えたような臭いが鼻をつく。

今までの自然の良い香りに僅かに焦げ臭さが混じる。

先でキャンプでもしているのだろうか？

ハルトは遠くに自分がいた場所と同じような開けた空間を認め、そこにいる者たちを見てしまい、足が地面に埋まるような感覚を味わう。

見つければ、殺されるとすぐさまに無事な木の近くで腰を下ろす。動悸が乱れる。心臓を潰すようにして押さえて木から顔を覗かせる。

さっきみた景色は幻覚じゃない……！

大きな、虎と対峙している人間。

ハルトが初めに聞いた声は人間の悲鳴。

そこらに転がる体の半分を抉られた人の死体にハルトは胃からこみ上げてくる物質を両手で塞ぐ。

声を出してもまずいと強く。

強烈な、血の匂いとカラスに弄繰り回されたあとのごみのようにボロボロになった人だったもの。

抉るような強烈な映像が、脳内に色濃く残り体を震わせる。

なんだよ、あれは……！

夢で見たいレベルじゃない。

よっぽど精神状態が不安定でなければあんなものは見ない。

自分がそんな状態ではないはずとハルトは再度確認する。

人の死体が転がっている近くでは激しい衝突が繰り広げられている。

魔物とも呼べる馬鹿でかい虎に相対しているのは大柄な男。

大柄な男は丈夫そうな銀色の鎧を身につけ、刀を振るっている。

苦悶の表情で虎の攻撃を紙一重で回避しているが、体には大なり小なりの傷が目立つ。

もう一人細身の身体の男が弓矢を飛ばして虎に攻撃しているがすべて厚い体毛に弾かれている。

虎は、大柄な男が小さく見えてしまうほどの体躯だ。

動物園で見る虎とは大きさが桁外れに違った。

大きな牙に、鉄柱のような頑丈そうで太い四肢。

虎の後方で尻餅をついて目の中を揺らしているハルトと同一年くらい少女がいる。

少女は大きな胸をしていて、普段のハルトならすぐさま声をかけていたが今はそんな状況下に置かれていない。

転がる死体は二つ。

人間側は全部で五人いたようだ。

だが、二人は既にこの世を去っている。

光輝く刀を自身の腕の一部のように扱っている大男が虎と戦っている姿に心から応援の言葉を送る。

男に負けてほしくない。

映画のワンシーンを見ているような気持ちでぐっと手を握る。

もしも、あの男が負けたら、次は俺かもしれない。

そう考え出したら体中からべたべたと嫌な汗がにじみ出る。

刀を巧みに使っていた男が左側から右側へ駆けるように薙いだ。

虎はあっさり避けて、男はにやっと笑う。

ハルトはなんで笑ってるんだと焦りの気持ちで愚痴をもらしていたがすぐに理由が分かった

男は初めから避けられるとわかっていた。

初めから二撃目を入れることに重点を置いていたのだ。

先の攻撃により生まれた死角へ駆け込み、抜けるように腹を斬る。

やった！ 我がごとのようにハルトは空気を多分に含んだ拳を胸の前で構える。

気分は鼻肩にしているチームが試合に勝ったときと同じ。

ハルトが顔に笑顔を浮かべていたが、次の瞬間には一転 絶望

に変わる。

虎は致命傷には至っていなかった。

攻撃を喰らった部位は虎の中でも一番に頑強な場所で鉄のような堅さの皮にむしろ焦ったのは大男のほうだ。

虎はひっかかったなといわんばかりに顔を大男に向ける。

まるで、わざと一撃を喰らって人間側に希望を持たせたかのよう  
なその顔に、ハルトは身震いする。

虎の放った一撃が大男の腹の肉を裂く。

大男はもうこれ以上戦う余裕はないと自覚していたのか、残りの力をすべてこめたカウンターを放つ。

刀が太陽を打ち負かすほどの光をあげて、虎を襲う。

光の奔流に飲み込まれた、虎はその状態にありながらも大男の顔面に爪を刺した。

なぜ光が生まれたのか分からないが、大男の技は確かに虎にダメージを残した。

虎の顔と体を半分ほどまで斬っていたのだ。

男はハルトが隠れているほうへ顔を向けて満身創痍の体を押さえながらそれでもまだ立っている。

ハルトの覗き見ていた両目が男とかみ合う。

なんとなく、だがハルトはあの人がこうなることを分かっていたのだと思った。

虎が罨を張っているのをすべて予想済みで、仲間を逃がすための時間稼ぎの一撃だったのかもしれない。

かっこいい人だなとハルトは怯えながらも賞賛の念を送る。

虎はさすがに予想外だったのか傷口を押さえながら後ずさるが死ぬほどのダメージではないようだ。

それでも瀕死の状態であるには変わらず、大分ダメージがかい。あと一撃さえ入れられれば大男に軍配があがっていたはずだ。

圧巻な攻撃を放った男を虎は大木のような太い腕で吹き飛ばす。

男は抵抗する力もなくボールのように吹き飛び木にぶつかり止まる。

飛ばされる間に大男は自分の刀をハルトの近くに投げた。

何回転かしてハルトが手を伸ばしたら届く距離に刺さる。

「く、くるなっ！」

明らかかな怯えが混じった声をあげながら弓を射る男。

勝ってもらいたい、最悪虎をひきつけて逃げてくれるので構わない。

もしも、あいつがいなくなったら次は俺なんじゃないかと考える  
と体が竦む。

夢、だと理解していても妙に現実的な木や地面などがさらにハルトに恐怖を与える。

(夢、なのか?)

その疑問はもつともだった。

十六年間生きてきてこんなリアルな夢を見たことがない。

(夢じゃないならなんなんだよ……)

ハルトは首を振る。今は虎から目を離してはいけない。

慌てながらも傷口を的確に狙った男の矢は百発百中とばかりに虎の傷を覆っていくが、虎は意に介さず鈍い足音をあげて悠々と歩く。矢では決定打を出せない。

男はとうとう武器を捨て敵に背を向けて走り出す。

無謀だ。

虎は走るのが速い。攻撃に回す力よりも走ったりするほうが力の使い方に長けている。

動物の脚力に人間が勝つなんて不可能なのだ。

逃げ出す瞬間を狙っていたのか。

虎は男に飛び掛り背中から押し倒して、鋭い爪で体を研ぐように何度も刻み続ける。

凄惨な光景に目を逸らす。

ハルトは……こみ上げてくる胃液を必死に抑えながら、早く覚めてくれとわずくまっつて祈り続ける。

口の中が乾き、体中に不思議な痛みが駆け巡る。

ばりばりと堅いものを噛み砕く音が耳を突き破り、一気に気持ち悪さが最高潮に達したハルトは耳を潰さんばかりに押さえる。

夢が覚める気配はない。

先程頭にちらつと現れた疑問がもう一度心に落ちてくる。

そもそも、夢、なのか？ 夢じゃないならなんなんだ。

誰か教えてくれ俺が納得できる理由を。

だけど、誰も教えることはできない。

(異世界トリップとか?)

自分が納得できる答えを模索している最中でつい先日読んだ本は確かそんな内容だった。

知らぬ間に異世界にいた。

今の自分とびっくりするくらいあてはまる。

初めは小さかった答えは段々と脳を支配していく。

ハルトの状況は、異世界トリップまたはそれに近いなにかなのかもしれない。娯楽でしかありえない非科学的な異世界トリップを受けられるなんてことは普通はできない。

だが、目の前に見せ付けられている。

夢の線も捨てきれないが、夢などという曖昧なものよりも異世界に迷い込んだというほうが今のハルトには得心できた。

やがて、ばりばり音がなくなる。

ハルトは男がどうなったのか見たくないけど見たいという矛盾した気持ちが生まれて、結局ゆっくりとした動きで男の末路を見た。

頭が、なかった。

首から上が食いちぎられて、体は辻斬りにでもやられたような傷があり傷がない場所を探すのが大変なぐらい残酷な光景だった。

体が、震えた。逃げ出したい。ハルトは吐き気がこみ上げるが声を出さないために手で無理やり押さえる。

これは、夢じゃない……! こんな現実的なものが夢なわけがない。

俺がこんな気味の悪い夢を見るわけがない。

早く逃げると体が悲鳴をあげるが。

足は氷ついたように動かない。

そればかりか首さえも思うように動かず、注視するように虎を見続けてしまう。

虎はハルトを見ていないが、目を離したら殺られるという錯覚に  
捉われる。

背中を向けた瞬間ぶっとい身体に潰されて殺される。  
先程の男の姿が頭にちらつく。

最後に残った女の子は、腰が抜けてしまったのか、地面にへたり  
込み涙を流している。

女の子は可愛い。いつもなら美少女きたー！ と喜ぶハルトだが、  
むしろ見なければよかったと後悔している。

女の子は敵うはずがない実力に気圧されて逃げることをあきらめ  
たような顔つき。

ハルトは、過去最高なほどに怖かった。それでも美少女を見てさ  
つきよりはほんのわずかだが落ち着き、動けないほどではなくなる。  
震える足をつねりあげて痛みで感覚を取り戻す。

恐怖は完全に消えることはなく残っていたが、さつきよりも動け  
る。

ゆっくりと、足音を立てないように刀を拾い移動を始める。

可愛い女の子を助けるために。

ハルトは、正義のヒーローに憧れたことはあった。だが、所詮憧  
れ。

自分はどれだけ頑張ってもそんなものにはなれない。

現実を知り、絶望がたまっていく。

年を重ねることにそんなものに憧れていた自分を恥じるような感  
情さえ生まれていたのに。

まさかこんな状況で目の前の子を『助ける』なんて行動をすると  
は自分で自分が分からなくなる。

目の前の命が消えることを拒み必死に止めようともがいている。

単に美少女だからという下心も三割程度はあった。

虎は、鼻が利かないようだ。耳も大男にやられたのと戦闘による  
疲労からか随分聞こえていないようだ。

確認して勝機があると実感し、希望が生まれる。

もう、敵は目の前の女の子しかいないと考えている虎にじわじわと近づく。

ハルトはゆっくりと、だができるかぎりの精一杯で大男が使っていた刀を頭上へ。

ずっしりとした刀で体育以外で運動をすることがないハルトには少々重たい。

それでも頑張れば両手で振り回せるそれを筋肉を目一杯引き締め、穿つように振り下ろす。

虎は、少女を殺そうと腕をあげたがハルトが振るった一撃が止める。

大男が残した一番目立つ傷に吸い込まれるようにしてハルトの刀がヒットする。

虎からは血が噴出され、刀が血を受け止める。

虎は、今までの疲労が一気に現れたのか態勢を崩して地面をのた打ち回る。

今が、チャンスだ！

意気込みハルトは右足を前に踏み込み、追撃とばかりに傷口へ刀を刺す。

「うおおおおおおおお！！」

そこからは何も考えずにただただ全力で何回も斬る！ 斬る！

斬る！

手に伝わってくる肉を断つ感触。

できるなら一生関わりたくない感覚に気が狂いそうになるのを必死に押さえて何度も斬る。

傷口ばかりを重点的に斬り続ける。

疲労が腕に溜まる。

振り上げるのが億劫になる。

段々腕が重くなってくる。

それでもやめることはない、できない。  
虎が全く動かなくなったのを確認してもやめることはできなかった。

止めてしまえば、虎が動き出しそうな気がしたからだ。

「もう、大丈夫です！」

ハルトの腰に柔らかい感触が伝わる。

狂ったように刀を振っていたハルトはそこでようやく正気を取り戻した。

途中から、ほぼ無意識になっていた。

意識が戻ると同時に生き物を殺した感触が手によみがえり、ハルトは刀を手から零して、体を地面に預ける。

空が青かった。

獣と血のあまりよろしくない臭いが気にならないくらいに綺麗だった。

体についた血が洗い落とされるような気がした。

「お前、だいじょうぶ？ 怪我ない？」

声はいつもどおり問題はない。

震えた声という格好の悪い出来事はないようだ。

ハルトはさりげなく少女の髪を撫でる。

ハルトに髪を撫でてもらった少女は嬉しそうに目を細める。

女の子は頬を朱色に染めながら、「あなたのおかげです」とハルトに言う。

(可愛いなあ。というかさっき胸があたったんだよね)

思い出してにやにやしそうになる。

さっきまでは悪夢だったが、良い夢に変わった。  
いや、そろそろこの現実を受け入れたほうがいいかもしれない。  
ハルトははあ、と息を吐き出して最終確認のために頬をつねる。

「やっぱり、夢じゃねえーか……」

異世界だと理解してしまったときだった。

赤く腫れあがっているであろう頬をさすりながら、ハルトはもう一度天を仰ぐ。

空は、地球のそれと変わらず綺麗なものだ。

目を閉じて、どこか満足したような感覚に捉われてゆっくりと目を開けると。

見えるはずの景色が何か、銀色の物に覆われる。

「……」

体を起こして、尻を地面につけたまま後ずさる。  
姿を確認した、してしまったハルトの心は絶望に染まる。

（せっかく、助かったのに……）

さっきの虎よりも大きな、全身を灰色に近い毛並みをした狼のようなものがあった。

一難去ってまた一難。不幸は連鎖するのかと感じずにはいられなかった。

## 2話 サウザンドウルフ

「サウザンドウルフ……！」

女の子が驚愕と絶望を含んだ器用な声を出してで後ずさる。

ハルトも先程の恐怖が甦り、かちかちと歯を鳴らす。

さつき倒した虎と同じくらいの体をした銀色の狼が目の前にいる。

逃げなくちゃ、と思うが視界の隅に映る美少女。

背中を向けて逃げるのは難しい。

「にげ、る」

必死に三文字の言葉を、うまく機能していない喉を震わせ、搾り出す。

肌に刺さる狼の存在感を感じて、埋められない力の差を感じる。

女の子は、ハルトの言ったことが理解できなかったのか動き出しそうにない。

ハルトはさつきよりも冷静に、しかし声は大きく伝える。

「逃げろってんだよっ！早く！」

少女は、それでも動かない。

動けないんだ。体が恐怖に縛り付けられて思うように動けない。

だから、多少恨まれるのを覚悟で少女の足を叩く。

心に罪悪感が走ったが今は助かることが先決だ、手段を選んではいられない。

女の子はそれで正気を取り戻したのか、ハルトの言われたとおり走っていった。

「随分と珍しい格好をした人間だな」

狼が喋ったが、あまり驚きはなかった。

この状況だ。今さら驚くことなんて難しい。

ハルトは手で近くにあるはずの刀を探しながら、会話ができるようなので話し合いを試みることに。

「見逃して、くれないか？」

震える唇を操りしどろもどろに発言する。

「……つまらないから嫌だ」

なんだ、その理由はと怒ってやりたいハルトだが、口を開くことが出来ない。

ハルトの命運は狼が握っている。迂闊なことを口にできない。

狼は、どこか嬉しそうに笑いそして、次には笑い飛ばしてしまいたくなるほどの馬鹿みたいに強い殺気と共に睨んできた。

ぎよろりとした狼の両の目に捉えられたハルトは痺れたかのように体が動かなくなる。

動かそうと思っても、体の所有権すべてを目の前の狼に取られたかのようにピクリとも動かない。

さっきやっていたように痛みでどうにかするレベルじゃない。

完全に飲み込まれてしまった 狼の威圧に。

ただの、威圧に指一本さえも動かない。

このまま放っておいたら目が乾いて涙が止まらなくなるなどハルトは考えていた。

「まぐれ、だったか」

狼は一気に興味が薄れたようにハルトへでかい足を振るう。  
狼にしてみたら蚊を叩くようなレベルかもしれないそれを喰らって、ハルトは地面を滑るように転がる。

竦んでいた体はそれで解かれた。  
痛い寝ていれば何も出来ずに殺される。

ハルトは跳ね飛ぶように立ち上がり、近くに転がっている刀の鞘と袋のようなものを掴んで逃げる。

走りながら危険な刀を鞘にしまい、ポケットに袋をつっこむ。

鼻から戦うことは考えていない。

虎に勝てたのは弱っていたのと、不意打ちだったから。

二度もまぐれで勝てるわけがない。

「戦いから逃げる、か」

ハルトの逃げ道に狼が回りこむ。

くそ。ハルトは舌打ちをする以外に何も出来ない。

攻撃しても当たるビジョンが浮かばない。避けられて反撃されて死ぬ。

狼がゆらりと動き、ハルトはやけくそにしまった刀を居合いの要領で鞘から抜き放つ。

長年剣を使っていたような鮮麗で、俊敏な抜刀は一寸の狂いもなく狼のわき腹を捉え、えぐる。

速い！

(？ 今の俺がやったのか？)

ハルトは自分でも分からないほどに体が軽くなった。居合いこそ初心者そのものだったが、速さが数段あがり狼でさえついていけていなかった。

狼は土煙をあげながら地面を転がる。

目に砂が入らないようにハルトは手で目を覆う。

これじゃあ、追撃をしかけられない。

相手の傷の具合が分からない以上、この土煙が罠なのかどうかも分からない。

突っこんだらやられる可能性がある。

ハルトは刀を持つ手から力を抜く。

ずきん！

ハルトは、不意に感じた全身の痛みで顔が歪められる。

初めの痛みがきつかけか筋肉が暴れ狂ったような痛みが続いて体を襲う。

ハルトは、やばいと感じながら刀を取りこぼす。

足元に刺さった刀にぞわっとしながらも拾うのはひとまず置いておく。

激痛が止まる。それを皮切りに痛みが引いていく。

数秒後には不思議と痛みは消えた。

体力こそ空っぽに近いが、痛みがなくなったことにより、ハルトは刀を握りなおす。

すると、じつと静電気のような痺れが届いた後に再び体に痛みが復活する。

(刀に何かあるのか?)

ハルトは当たりをつけて、鞘にしまう。

鞘に納まっていたときはこんなことが起きなかった。つまり鞘が鍵になるのでは? と考えたのだ。

予想通り痛みは消える。

刀に何かがあるのは確定した。刀を掴んで走り出し、後ろを確認

する。

思ったよりも深手だったようで狼はまだ、襲ってくる様子はない。一気に畳み掛けるのも一つの手だ。

だが、全力疾走したあのような疲労が残る体では満足に剣も握れそうになかった。

ハルトは無我夢中で走り続けた。

途中何度も転び、それでも休んでいる暇はない。

疲れた体に激励を送りながら、道なき道を進む。

走り続けて、数分。ハルトは気づいたら洞窟のような場所にいた。どうやってここまで来たのか分からないが、ここならすぐに見つけることはないはずだ。

やはり。戦うしかないのだろうか。

そんな考えが浮かぶがすぐに否定するように首を左右にふる。

あれと戦って勝てるとは思えない。

正面きって勝てるとは思えない。

唯一ある可能性は鞘から抜き放ったときの力。

手中に納まっている刀に目を向ける。

一種の呪いの武器か何かかもしれない。使った者の体力と引き換えに身体能力を強化する、とハルトは予想していた。

これを抜いたときの速さで放った斬りなら倒せる可能性はある。

狼が地面を転がっていたのを思い出して、セットとばかりに痛みも想起する。

ただ、すべてあの痛みに耐えられればの話だ。

ハルトは厳しいなと顔をしかめる。

来る前に拾った大男の持ち物に何かないかと漁る。

一撃でモンスターを倒せるような画期的なものがないかと拾ったが、何もなし。

そもそもそんなものがあれば大男が使っていただろうなハルトは残念がる。

一応収穫はあった。

ビンに入った赤い液体と同じくビンに入った青いビンが入っている。

ゲームなどで見るような代物だ。回復薬だと、確証はなかったがハルトはもうやけくそ気味にそれを飲み干す。

もしも毒だとしてもあきらめようと割り切っていた。今死ぬか後で死ぬかの瑣末な問題だと自嘲する。

舌が麻痺しそうな苦味が襲ってきた後に体が軽くなったのが分かった。

腕を見ると、傷はない。腹部に感じていた痛みや攻撃したときにできた痛みもかなり緩和されている

これで、一応戦えるだけの体力は取り戻した。

狼を倒す、又は逃げる方法を早急に考えねば。

相手は狼であるのだから当然鼻がきく。

ハルトがこうしている今も狼は着々と迫っている。

だから、できる方法を編み出さねばならない。

一、交渉。すでに失敗。

二、逃走。逃げられるのならとくに逃げている。可能性は低い。

三、戦う。勝てるための技はある。可能性は結局低い。

三の、戦うが一番実現が可能そうだ。

二も可能性はほとんど変わらない。

だが、この森がどれだけの規模なのか分からない、森を抜けたとして狼が追ってこないとも限らないということまで三しかできそうには見えない。

今さらながらに可能性の低い賭けだよなとハルトは頭を押さえる。それに、と狼のダメージを思い出す。

一撃は狼にかなりのダメージを与えていた。演技とは思えない。

あと一回、二回同じのが当てられればもしかしたら、万分の一くらいの確率で倒せるはずだと自分を励ますために呟く。

やるしかない。

期待はしない、期待して変な風に緊張したらうまく戦えない。

ゼロの確率が一になったにすぎないとハルトは自覚している。それにしても、ハルトは苦笑する。

この数十分で随分と成長したよなと自分に問うていた。生か死のどちらか一つしかないような状況なら人間かなり賢くなるようだ。

今度からこの状況で勉強すればはかどること間違いないね。ふうーと心を落ち着かせるためにハルトはなるべく心に軽い出来事を考えて空気を吐き出す。

「狼は、いない……」

周囲に意識を張り巡らす。気配で気づける達人ではないハルトだがさすがにあのでかさを見逃すはずがない。

安心しきったハルトの独白にしかし絶望の返事が返ってくる。

「何か、対策でもたてられたか？」

すると、小さい、中型犬のような大きさで先程みた色の狼がハルトの横に鎮座していた。

ハルトが驚いていると中型犬はまた元の、理解できないサイズに戻っていた。

落ち着け、落ち着けと言い聞かせて、肺があるだろう位置を手で押さえる。

ハルトは相対して死ぬビジョンしか浮かばない頭に愚痴りながら、「殺すなら、殺せよ」

ハルトは剣を左手にもったまま両手を開いて少しずつ近づいていく。

最高威力の一撃を最も近い位置からぶつけるために。

いくら速くても距離がある程度あらず外す恐れがあるからだ。

「その目、あきらめた人間の目ではないな」

ハルトの目の奥には色々な感情が渦巻いていた。

すべての感情が混ざり合った結果、ハルトには強い意志の籠った瞳が生まれていた。

ばれちまったかあとハルトは口の中で呟いたが歩むをやめない。交じり合う視線。さっきのような威圧を放ってくる気配はない。

ハルトは気づいていないが狼は確かに威圧している。それに屈しない程度には心に余裕があるのだ。

ハルトは、真正面に立ち狼を睨む。

狼もまた睨み返して、交差する視線。

先に動いたのはハルトだ。

流れるように鞘から剣を抜き、力が漲る。

体を裂いて出てきそうなほどの力をハルトは腕と足に集中させ俊足の斬りこみを狼に叩き込む。

手に伝わる斬った感触に、首を捻る。

はらはらと舞う、光を反射させる銀色の毛。

ハルトが捉えたのは狼の体ではなく、毛だったのだ。

研ぎ澄まされた神経は、一つの答えを導き出す。

避けられた。

希望が、期待が、一気に絶望の色に染まる。

手がなくなった。

唯一縋った刀の力は狼に及ぶことはなかった。

それでも攻撃の手をやめなかったのは意地のようまだった。

狼はすべてを見切り、かわしていく。

狼は獣としての本性からか、ハルトの力にタイムリミットがある

ことを悟ったように避け続けた。

ハルトは段々と狼の動きについていけるようになりとうとう刀が狼の腹を抉る。

狼は顔こそ歪めたがまだ、戦えそうだった。

この調子ならいける！

ハルトが確信したその時に タイムリミットがやってきた。

筋肉が反逆を起こした。

暴れまわる痛みにハルトは手の握力が弱まり、刀が落ちる。

ハルト自身限界なのは分かっていた。

受身など取ることもできずにぶっ倒れる。

目に汗が入り、染みる。開けていることが困難になりながらもハルトは近くに落ちた刀に手を伸ばす。

あと、一撃なんだ。大きな一撃が入ればあいつを倒せるはずなんだ。

あきらめたくない、死にたくない。こんなわけの分からない所で、死んでたまるか。

ハルトの心の中には苛立ちがたまっていく。

なんで、どうして。

(俺が、こんな目に会わなきゃいけないんだよ……)

汗なのか、涙なのか分からない。

理不尽なことに巻き込まれて、そして死ぬ。

理不尽極まりないこの状況にハルトは何もできなかった。

体を休めたい。眠たい。もう、どうでもいいや。

狼に食われて死ぬ。それが決定した。

ハルトはここで寝たら次目が覚めるのは来世か、死後の世界だろうなど自嘲気味な笑みを作りながら目を閉じる。

すべてをあきらめたハルトの意識はそこで途切れたのだ。

「この人間。面白いな……」

ハルトを襲っていた狼が呟く。

狼 サウザンドウルフである狼のレングは自分に傷を負わせたハルトを興味深そうに見ている。

何十秒かそうしていたが、いつまでもぼうとしているわけにもいかない。レングは人型となり、簡単に応急処置をする。

といっても体力がなくなっただけなので、時が癒すのを待つより他に手はない。

レングは元々大男達を自分の糧にしようとしてあの場に行ったのではない。

サウザンドウルフはこの森を支配している関係で治安維持のようなことをしているのだ。

虎 デイバルタイガーはこの森を荒らしていたということ。サウザンドウルフのリーダーであるレングが直々に折檻しに向かっている最中にハルトを発見したのだ。

完全に誤解されるタイミングであったが、ハルトにとってレングは救世主のものだったのだ。

デイバルタイガーを倒した人間に興味を持ち、戦闘狂としての血が騒いだレングは相手を威嚇して戦いを申し込んだ。

結果は、十分だった。

小さき戦士をレングは抱えて、自分の村 サウザンドウルフが暮らしている に向かった。

### 3話 説明

狼が近づいてくる。

ハルトは逃げようとしたが、体は麻痺したかのように動けない。  
狼が大きな腕を振り上げ。

「はっ！」

ハルトはがばつと体を起こす。

冷や汗が肌をべとつかせる、嫌な感覚を味わってから心臓に手をあてる。

生きている。どくどくと手に伝わってくる脈動を感じてからハルトは周囲を見回す。

まず自分がいる場所はベットだった。

ベットの近くには窓があり、光が差し込んでいるのがわかる。

食事をとるためのテーブルのようなものはあるがキッチンはない。

テーブルに置かれている刀を取り、外へ向かう。

簡素な家だな、と思う。

人が暮らすにはあまりにものが少ない。

こっちの世界では普通なのかもしれない。

外に出ると似たような木の家がいくつもあった。

所々に人がいる。

じゃれあいと表現するには行きすぎな喧嘩紛いの殴り合いや、捕

まえたモンスターにかぶりつくものなど。

ハルトはすぐに視線を外した。

ハルトはさっそく近くにいた男に話しかける。

(耳と、尻尾がついてる……)

ここが異世界なのは揺るがない事実となった。

まだ心のどこかで、地球のどこかであってほしいという気持ちがあったのか、ハルトの心には小さいがっかりが発生していた。

「気がついたのか、人間よ。名前は……そういえば聞いていなかったな」

先に声をかけられる。

助けてくれた人かもしれないので丁寧に話そうと心がける。

「俺の名前は」

フルネームを名乗ろうとしたが、別にいいんじゃないかと思いで口を閉じる。

時間にして数秒ほど悩んでから、名前だけ言おうと決めた。

「ハルトです。えーと、あなたは？」

「俺はレングだ。体はもういいのか？」

肩を回したり足を伸ばしたり軽く準備運動のようなことをしながら

「んー、まあ、無理に動かすと痛いけど。動けないことはないです」

「そうか」

そこで会話に一区切りついたので一番気になっていることを尋ねる。

「でっかい狼に襲われてその後から記憶がないんだけど……。あな  
たが助けてくれたんですか？」

ハルトの質問はおかしいところはない。

だが、事情をすべて把握しているレングにはあまりにも間抜けな  
質問に聞こえた。

よってレングは馬鹿笑いをあげる。

ハルトは柔和な笑顔を浮かべながらも頬とこめかみをひくつかせ  
る。

こいつ、殴ってやるうか？ と本気で考えた。

「なるほどな。ハルトは俺の事が分かっていないみたいだな」

嬉々とした声をあげてから、本当の姿を見せてやると宣言する。

欲しいおもちゃを貰った子供のような笑顔を見せながら、何かを  
呟く。

レングの口からもれた声が終わりを告げると、レングの体が光り  
始める。

(進化でもすんのか?)

ハルトは手で目を光から庇う。

光はそれほど強くはないので目を細めながら様子を確認する。

光が治まったのを手越しに理解したのでゆっくりと目を向けると。

「どうだ？ 何か思い出したか？」

それは本当にいたずらが成功したような無垢な子供の笑顔で。

対照的にハルトはひくひくと恐怖を思い出した顔で歪に笑う。

レングは二メートルほどだった人間の身長よりも上だけなら小さ

くなっている。

二本足で立てば遙かに今のほうが大きい。

ハルトを襲った狼 目の前にいるのはまさしくそれだった。

ハルトの頭の中には混乱が渦巻く。

「俺を殺すつもりじゃなかったのか？」

ようやく搾り出した言葉は、危険極まりない物だった。

レングはいつでもハルトを殺すことができる力を持っている。

逆にハルトは一撃必殺の技しかない。

見渡せばレングの仲間たちがいるのがわかるこの場で戦いが始まればハルトに勝ち目はない。

「別に。ただ、お前の力が強そうだったから、戦ってみたいなと思っただけだ。元々あそこにいたならず者のデイバールタイガーを殺しに行っただけだ」

「でい、でいばーるたいがー？」

初めて聞く名にハルトは首を捻る。

「お前が倒した虎の名前だ」

レングが戦いの意志がないのを悟ったハルトはふうと安堵の息をつく。

ひとまず、命の心配はしなくていいようだ。

「まさか、人と狼の両方になれるなんてな」

モンスターが人の姿にもなれるのは危ないなとハルトは顎に手を

やる。

人を襲うつもりのモンスターが人間の姿で人間が住む町に侵入すればあっさりと襲うことができてしまう。

「両方の姿を持つものは極端に少ないな。人間はモンスターをランク付けしているが、Sランク近いモンスターではないとほぼ人間の姿をとることはできないな」

生まれつき人間に近い姿をしている種族を除いてな、とレングは付け足す。

ハルトが危惧していることは簡単には起こりそうにはなかった。

「Sランクねえ。俺が倒した虎はいくつか分かるか？」

「確かあいつもSだったな。だが、人型をとったところを見たことはない」

ハルトは大男を思い出す。

あいつはかなりのバケモノだったのだろうな。Sランクにあれほどの痛手を負わせたのだから。

あの男がいなければハルトの命はなかった。

感謝してもしきれない。

「……人とモンスター、両方の姿をとれるのはSランクしかない？」

「大体は、そうだな」

「なら、あんたもSランク!？」

気づくのが少し遅いハルトは大声をあげて左足を後ろへひく。レングもあきれたように片目を瞑る。

「今頃か。人間が定めたランクに興味などないがつまりはそういうことになるな」

ハルトは逃げ出したい気持ちで心がいっぱいになった。それもおかしくはない。

Sランクのモンスターがうじゃうじゃいるこの集落に人間がぼり一人いるのだ。

ハルトが怖いっていると、レングは朗らかに笑い、それから思い出したとばかりに耳をぴんと伸ばした。

ハルトはアンテナみたいだと思った。

「あの剣は、アニメスブレードか？ それに、ディバールタイガーの魂を吸収したのか？ とにかく、ハルトは随分運がいいのだな」

「アニメスブレード？」

辞書でもない限りわからなそうな単語が溢れたのでハルトはハテナを浮かばせる。

「……何も知らないのか？ おかしな人間だな。アニメスブレードは人間が求めるこの世界最強の剣だろうか？」

ハルトは、このまま話を進めることに面倒を感じている。

理由は簡単でこの世界の常識を押し付けられてもさっぱりだからだ。

ただ、異世界から来ました、てへっ。って言って信じてもらえるのだろうかという不安もハルトの胸のうちにはある。

異世界人に対してどんな印象を抱くのか心配材料が豊富で言い出せない。

もしも、異世界人は皆殺しとかそんな世界だったらハルトはこの場で命を失ってしまう「のだから。

言いたくても言えない事実冷や汗を垂らしながら適当にあわせる。

「別に、俺は戦いは好きじゃないしな」

「なら、なぜあそこにいたんだ？ この森は、奥に進めば進むほど強いモンスターが出ることで知られているのに、なぜこんな奥地にいた？」

「ま、迷子だ」

ハルトは口笛を吹く真似をしながらレングから顔を逸らす。  
あきらかに汗が出ていて、嘘だと丸分かりだ。

「みえみえな言い訳だな」

レングがあきれたように肩をすくめるのでハルトは苦笑い。

(嘘とか結構つくから平気だと思ったんだけどな……)

確かにハルトは年中嘘を言っている。

といっても日常会話で流される程度の大した問題にならない小さな嘘だけだ。

こういった重要そうな場面に慣れていないハルトはどうしても顔にでてしまう。

「ちゃんとした理由を話せばしばらくはここに置いてやる。仲間にも説明はしてやる」

それは、ハルトにとっては最高の条件だった。

ここが地球ではないと分かった以上、地球に戻る方法を探さねばならない。

ただ、今のハルトには何も無い。

森を抜け出す力もなければこの世界の常識　知識もない。

ハルトは無の状態から地球に帰る方法を見つけなければならなくそれはほぼ不可能だった。

「もしも、理由を話さなければ？」

「殺しはしないがこの村からは出て行ってもらおう。素性は知れない、理由も分からないような奴をいつまでも追いとくわけにはいかないからな」

「ここつて、奥地、なんだよな？」

さつき、『こんな奥地』とレングが言っていたのが頭に残っていたハルト。

まだ狼の状態であるレングは大きな頭を縦に頷かせる。

ハルトの頭の中には恋愛ゲームのような選択肢が現れる。

生きるか、死ぬかの二択。ハッピーエンドかバッドエンドか。

ここで正直に話すか。何も話さずに森を脱出するか。

前者は先程述べた危険がある。後者は言わずもがな。Sランク級のモンスターとまではいかなくても高いランクのモンスターがでるのは間違いない。

一回くらいなら剣を使って逃れることもできそうだが、体の回復などを考えるとモンスターとのエンカウントはできて一回だけ。

それで森を脱出するのは不可能と思えた。

なんだとハルトは笑う。

既に一つしか道はなかった。

話したほうが生き残る可能性は高い。なら、話そう。

決心すると同時に心臓がばくばくと脈打つスピードがあがっていく。

送られる血が速すぎて血管がぶちきれんんじゃないだろうかというほどの加速にハルトは体がふらつきそうになる。

怖いんだ。ここで死ぬかもしれないと考えると。

自分の口ではないかのように開くことができないハルトを、急かさずに待ってくれるレンゲ。

レンゲはどんな事情を予想しているのだろうか。

ふと、そんな考えが生まれる。

(犯罪者とかだろうか?)

気を紛らすために色々と推察していると幾分緊張がほぐれる。

よし、と頬を叩く。

「俺は、この世界じゃないところから来たと思うんだ」

その発言を皮切りにハルトはこの世界に来る少し前から現時間までの出来事を話し始めた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0757y/>

---

地球に戻るためにまずは異世界を

2011年10月31日02時04分発行